

ごんぎつねは、子ども？大人？

宇出津小学校 高瀬 将史

2006.2.18

私がこの疑問を抱いたのは、初めて小学校の講師となった3年前、4年生で「ごんぎつね」の授業をしたときのことでした。休み時間に私のところへきたKさんが言いました。

「先生、ところでごんって大人ですか？ 子どもですか？」

しっかりとした答えをもっていなかった私は答えることができませんでした。

それから授業で「ごんぎつね」をあつかう度に考えては、そのままにしてしまっていた疑問を、今回、検証してみました。きっかけは、2005年5月のサークルで、このことに関する話が出たことです。

昨年度、「ごんは子どもか大人か」で討論を行いました。その時の記録を次のページから書きますが、子ども達は長い物語の中から、自分の意見の根拠となる部分を一生懸命探して、話し合っていました。

一番、争点となるのは以下の冒頭文です。四角の中に入る言葉を入れてみてください。

これは、わたしが小さいときに、村の茂平というおじいさんから聞いたお話です。

昔は、わたしたちの村の近くの中山という所に小さなおしろがあって、中山様というおとの様がおられたそうです。

その中山から少しはなれた山の中に「ごんぎつね」というきつねがいました。ごんはひとりぼっちの で、しだのいっぱいしげった森の中に、あなをほってすんでいました。そして夜でも、昼でも、辺りの村へ出てきて、いたずらばかりしました。畑へ入っていもをほり散らしたり、菜種がらのほしてあるのへ火をつけたり、ひやくしょう家のうら手につるしてあるとんがらしをむしり取っていたり、いろんなことをしました。

教科書には「小ぎつね」となっています。「子ぎつね」ならば子どもだとはっきりするんですけどね。しかし、ここを読み間違っただけで安易に子どもと決めつける子が多いのも事実です。一読したあと書いた初発の感想には、「子ぎつね」と書いた子が5人もいたのです。「小ぎつね」と書いていても子どもと決めつけている子もた

くさんいたことでしょう。

そこで改めて聞きます。ごんは子どもですか大人ですか？

以下は昨年度の子供達の討論です。(名前は仮名です。)

討論前 25名中 子ども派 22人 大人派 3人

良雄 大人だと思います。子どもは自分で穴をほれないと思います。

雅子 良雄さんに反対です。一人で生活するうちにできるようになったのだと思います。

晃 子どもだと思います。「一人ぼっちのこぎつね」と書いてあります。

由美 晃さんに反対です。「子ぎつね」じゃなくて「小ぎつね」だから子どものきつねじゃなくて小さいきつねです。

美香 大人だと思います。子どもは一人で暮らせません。

由美 自分のことを「わし」と言っているから大人です。」

雅子 由美さんに反対です。こどもでも「わし」という人もいます。

良雄 大人です。動物の子どもは葬式を知らないと思います。

裕子 大人に変えます。由美さんの言うように「小」だし、子どもではくりをどっさり変えると思う。

彩 子どもから大人に変えます。「子」じゃなくて「小」だからです。

博美 私も子どもから大人に変えます。由美さんの言うように「小ぎつね」だから大人の小さいきつねだと思います。

信二 僕も大人へ変えます。子どもは「わし」とは言わないけど、大人は「おれ」と言うからです。

雅子 信二さんに反対です。人間は言わないけど、きつねなら言うかもしれません。なまっているのかもしれない。

裕子 人間の子どもでも「わし」と言うかもしれないけど、「なまった」というのはちょっと・・・。

雅子 なまるかもしれません。

由美 子どもがなまったら「わし」って言う？

雅子 ごんは一人ぼっちで教育されてないから、言葉が変なの！

彩 大人だと思います。うなぎの頭をかみくだくなんて子どもにはできません。

浩一 子どもだからできないとは限りません。

雅子 子どもでもかみ砕けると思う。わたしだって固い物でも「カリッ」ってかみ砕ける。

由美 私も最初は子どもだと思っていました。でも「小ぎつね」の「小」が気になって辞書で調べてみたけどわかりませんでした。そこで同じ「小」を使う「小鳥」を調べてみると「小さい鳥」と書いてありました。「小ぎつね」

も同じように「小さいきつね」だと思えます。「子どものきつね」じゃなくて。

美香 ごんはかしこいから大人だと思えます。

晃 美香さんに反対です。子どもでもかしこいのはいます。

由美 大人の方が大学とか出てるからかしこいはずです。

理恵 それは関係ないと思う。

裕子 きつねの学校なんてないしね。

雅子 きつねは人間みたいに勉強したりしないしね。

討論後 25名中 子ども派 12人 大人派 13人

実は由美さんは、この討論の前、考えをまとめているときに私のところへ来てこう言いました。「この ” 小ぎつね ” って漢字間違いですよね。子ぎつねじゃないんですか。」「さあ、どうでしょうね。」と、答えると、国語辞典を出して調べていました。しかし、これだけでは大人とも子どもとも言いきれません。

子ども達もそう考えたようで、討論後は大人派、子ども派半々になりました。子ぎつねと書いてあればはっきり分かるのですけどね。ところが、「子ぎつね」と表記されていたころもあるそうなのです。そこで、宇出津小学校の図書室で探してみたら、なんと！！ありました、「子ぎつね」表記のごんぎつねが。ごんぎつねは2種類あったのです(この他にも「赤いきれ」「赤い布」などの違いがありました)。

では「小ぎつね」と「子ぎつね」で物語の内容はどのように違うのでしょうか。

< 益子広則(元中萩中小)の見解 >

「子ぎつね」としてとらえていくと、親なし、兄弟なしのひとりぼっちのごんということになり、いたずらも、ひとりぼっちの子どもぎつねだから無理もない、さびしくて仕方がなかったのだろうといった程度の物わかりのよい理解、つまり、いたずら好きの仕様ののいやつという程度のとらえかたになります。

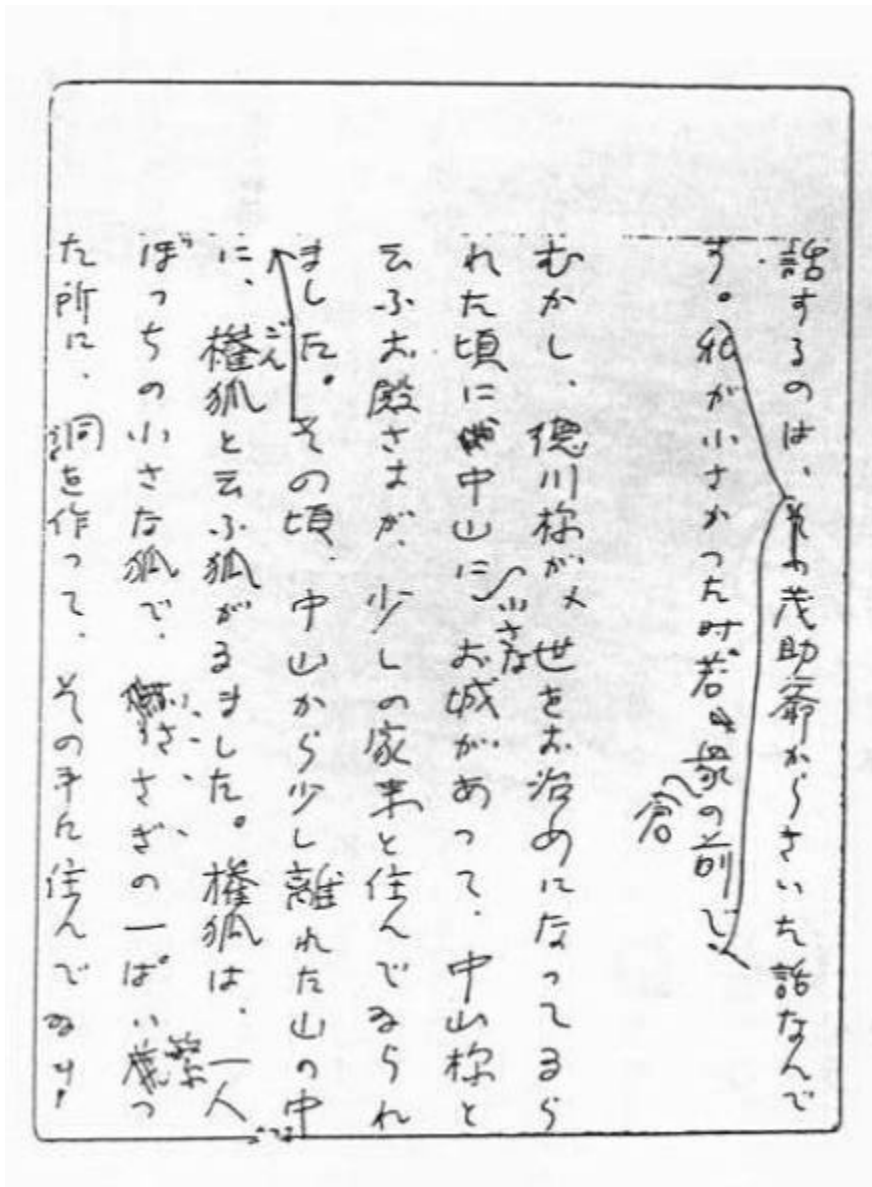
「小ぎつね」となると、それがどう違ってくるのだろう。「小ぎつね」であって「子ども」でないとしたら、また、鳥越信(早稲田大)のいう「若者狐」だとしたら、つまり「ある程度分別をわきまえた狐」だとしたら、可愛らしい悪戯ではなくなってきます。

孤独者がその孤独に耐えかねて、つながりを求め、いらだち、自分の存在を認めさせたい心の表れとしての悪戯、あるときはどうにもならないいらだちであり、時に破壊的であり、時に気まぐれな悪戯であり、というようになるのではないかと思います。

『国語に授業』(一光社)1977年8月号より引用

「小ぎつね」と書いたごんぎつねと「子ぎつね」と書いたごんぎつねの2種類の「ごんぎつね」という物語が存在することがわかりました。前者は「子ぎつね」であるごんの成長を描いた子ども向けの物語。後者は、若者の葛藤を描いた大人向けの「ごんぎつね」と考えられるのではないのでしょうか。では、原作者である新美南吉は、なんと書いているのでしょうか。

一人ぼっちの



半田市立岩滑小学校 HP「南吉学習」(<http://www.yanabe-e.ed.jp/>)

新美南吉自身がスパルタノート（草稿）に書いた「権狐」には、このように表記されており、また標題下に「赤い鳥に投ず」と書かれているそうです。しかし、赤い鳥に掲載された「ごん狐」には「子狐」と表記されているそうです。

新美南吉の投稿した原稿が残っていないことから、新美南吉が投稿前に推敲したのか、それとも赤い鳥編集長の鈴木三重吉が補筆したものは断定はできません。しかし、スパルタノートでは「小さな狐」だったものが、赤い鳥では「子狐」となり、現在では「小ぎつね」となっています。

さらに新美南吉の書いた作品の文章中の漢字使用率に着目してみると 34.6 % から 14.6 % とかなりのばらつきがあります。このことから読者の年齢を配慮してのことであるのは間違いないでしょう。しかも、新美南吉には小学校の代用教員の経験もあるのだから、漢字使用率については一般の成人より敏感だったのではないのでしょうか。

スパルタノート「権狐」の漢字使用率は 30 % とかなり高めとなっています。それに対し、赤い鳥に掲載された「ごん狐」の漢字使用率は 15.3 % に押さえられていました。このことから「権狐」は新美南吉が書いた大人向けの物語、「ごん狐」は鈴木三重吉が補筆を加えた子ども向けの物語とは考えられないのでしょうか。そして、現代では、南吉の意をくんで「小ぎつね」と直したのではないのでしょうか。元々が大人向けの物語である以上、「子どものきつねの成長を描いた」と考えるよりは「孤独な若者ぎつねの葛藤を描いた」と考える方が自然でしょう。

< 参考資料 >

上田信道の児童文学ホームページ

http://nob.internet.ne.jp/note/note_5.html